尾張國府宮の直會祭と人身御供及び追儺

文學博士　加藤玄智

私は先般尾張國中島郡の大國靈神社の直會祭の神事に列することを得ましたが、此祭事に就いて昔から、色々見方も有つた樣なので、これから此神事の意味の變遷等に就いて一通り私見を述べて見たいと思ふのであります。無論一家言に外ならないし、又將來研究の上は大に修正したい考であります。

今日では直會祭は、儺追祭と呼んで舊正月の十三日に執行する鬼やらひ、即ち追儺の御祭といふ事になつて居りますが、古い所では果してそれが、鬼やらひ、即ち追儺の御祭ばかりであつたか、但しは又人身供犧、即ち昔から云ふ人身御供の形跡のある御祭ではなかつたかといふ事が、屢々問題になつて居るのであります。そこで此等の事に關してこれから卑見を述べますと同時に、果して日本に一般的に考へて、古來人身御供と云ふやうなことがあつたかどうかといふ事に就いての卑見も、述べて見たいと思ふのであります。そこで先づ此御祭を御存じない方の便宜上、此御祭が大體どういふものであるかといふ

事を、初めに說明いたします。

今日の所では直會祭は、大體二つの部分から成つて居る。一つは晝の御祭、他は夜の御祭であります。晝の御祭は一種の裸祭であつて、他に其例を取つてお話すれば、岡山の最大寺の會陽と同種類のものであり、又越後の浦佐の毘沙門堂の堂押と大體同じ性質の祭であると思ふのであります。それであるから尾張の大國靈神社の直會祭は、これも國府宮の裸祭とも稱へて居るのであります。即ち晝間青年壯年の者が、寒中眞裸體になつて神社の前の川に禊して、さうして互に押合ひながら、自分の身に脊負つて居る所の厄を他の人にくつ付けて、それを祓ふといふ意味の活動をやつて居る間に、其日シン（心の意）と稱して厄を正式に脊負ふ所の男が定められて居つて、それが御宮の側の方に別に造つた所の直會舍から出て參つて、社の側の一定の土地まで來ますといふと、何百人と群集して居つた澤山の裸男が、其シンとなつた所の人を目掛けて突進し、之に向つて自身の厄をくつ付けようと試みるのであります。其勢ひは頗る猛烈である爲に、其シンになつた男が、身體の肉を裂かれ血を出して負傷するやうなともあるから、屈强な男が數名之を護衛して、其シンになつた所の男に觸れさせぬやうに防禦する任務を帶びて、其シンになつた男を、御宮の脇から次第に迂廻して元の直會舍まで送り込むことを以て、其晝間の儀式が終るのでありますが、其シンになつた男が、御宮の前の門の如何なる部分を通過したかといふと

に依つて、其年の五穀の豐凶を占ふといふとも伴つて居るのであります。兎に角斯かる次第であるから、當日は參觀に來る所の人は、近郷近在から澤山あつて、名古屋から稲澤といふ國府宮に達して居る東海道線の汽車は、日に何回となく臨時列車を發し、稲澤の停車場は特別な設備をして乘降の客を制限するといふ騒ぎで、大層な混雜を極めるのであります。是の如くにして其畫の御祭が終る。之に續いて夜の御祭でありますが、夜の御祭は二時から始つて東が白む頃に終るのであつて、此に所謂人身御供の形跡がある儀式を見ることが出來るのであります。即ち前に申上げたシンと稱する所の人が、畢竟人身御供と申される所の人物であつて、此場合には御宮の側に一時的の幄舍を拵へ、其處に尾張の大國靈の神樣と奇稲田姫の二柱を請じて、其前で神主が夜陰に乘じて祝詞を上げ、其シンになる人間は幄舍の側に蹲つてをるのであります。そこで其御祈禱の祝詞が濟みますと、其シンになる男に鏡餅を脊負はせ、それに人形を付け、更に其側に蠟燭數本を立てゝ之に火を燈し、さうして丁度「鬼は外」をやるやうに其幄舍の周圍を三回シンになる男を追廻し、神主始め其他の人が、之を鬼として追ふのであります。其時にぶつけるものは、桃の枝と柳の枝とを二本合せて觀世撚で結び、一寸ばかりに切つた飛礫を拵へて、之を其シンになる男即ち其場合に於ての鬼にぶつけるのであります。かくして其男が人々に追はれて其幄舍の周圍を三回廻る間に、蠟燭に燈されて居つた火が、自然消えるのである、其消えやうに依つ

て、又其年の豐凶を占ふとになつて居るさうであります。さうして三回逃廻つた後に、社前約半丁ばかりの一定の土地に逃込んで、其處に其脊負つて居つた餅を下して土中に埋め、其シンになつた厄を脊負つた所の男は、急いで自分の家へ歸つてしまふのであります。さうして一方では、先程投げた柳と桃の枝とで出來て居る小なる飛礫を、其場で拾ひ集めて燒いて灰にして、さうして其灰を來年まで取つて置いて、其厄を脊負ふ男、即ちシンになる男に脊負はせ、餅を搗く時に、又其中に入れて搗くさうである。

かくして夜の御祭の儀式が、すつかり濟むのでありますが、今日では其厄を脊負つて行く所の男は、志願する者から採用するさうで、多くは厄年に當つた所の者がやるとになつて居るさうであります。

是に就いて昔の記錄を讀んで見ますといふと、尾張名所圖繪を始めとして、神道名目類聚抄、本朝語園、諸國里人談、神家常談等何れも記事は大同小異でありますが、昔は人身御供として、それ等の人を捕へて來たといふ形跡が、間々見えます。そこで毎年のとでありますから、其附近の人はそれを知つて、舊正月の十一日頃から一寸も外出をしなくなるさうであります。そこで止むを得ず、其處を通過する所の旅人を捕へて、厄を脊負はせる人間にして神前に供へ、人身御供の役を勤めさせたらしいのである、或時の如きは東海道を急行する飛脚を捕へて、淹留せしめたから、後に大に物議を醸したといふと

も傳へられて居ります。さういふ風で旅人を捕へるのに、餘程遠くまで人々が武裝して乘出した形跡が見えるのであります。さうして其連れて來た所の人は、一晩神主が神前に備へて、今日やるやうに厄を脊負はせ、それが鬼やらひと結付いて今日に殘つて居るやうな風に、之を追掛け廻し、遂に追はれて走つた結果、何處かで倒れてしまふ所に、其餅を埋めたさうであります。然るに其餅を埋めた所は、其年の厄が一杯滿ちてをる譯であるから、所謂タブー化された場所となるので、それが畑とか水田とかいふ所の一部に行はれゝば、それを所有してをる者は、非常に迷惑を感ずるのであります。何故かといへば、其タブーされた場所は、穀物を作りに入るとが全く出來なくなるからであります。隨てそれだけ田地田畑が減つた譯になり、所有主からは困るので屢々抗議を神社に申込まれたといふとも聞いて居る。さういふのが此大國靈神社の直會祭の古今の概要である。唯今申上げた通り、旅人を矢鱈に捕へた時には、飛脚の如き急用を帶びた者を兩三日其處に滯留せしむるといふとは、如何にも交通の安全から考へても、不都合極まるとであるので、尾張の藩主であつた德川宗勝が寛保年間に土地の學者である吉見幸和をして、古今内外の書籍に徵して斯の如き祭事が、果して正しいかどうか、或は所謂淫祠ではなからうかといふ点を考證せしめて、遂に吉見幸和の意見に依つて、人を捕へて神前に供するといふとを淫祠として禁するとに、藩公が命令を發したといふとであります。其爲に當時の人は、大に喜んだといは

れて居ります。其精しいことは源誠之の書いた吉見宅地書庫之記に出て居ります。斯ういふ有樣であるから此神事は歴史的に考へて、一方では其厄を脊負つて逃げる人間が、詰り人身御供の位置を現して居るといふ点から見れば、人身御供が昔あつたのを、段々形を變へて殘して居るとも考へられますし、それが後に追儺即ち鬼やらひと結び付いたのではなからうかとも、考へられてならぬのであります。ところが尾張に近い所で全く斯ういふ御祭が鬼やらひの方面にのみ現れて、一寸も人身御供の方面の見えないのは、伊勢參宮名所圖繪の三卷に見えて居る惠日山觀音寺鬼おさへの祭であります。此になりますといふと、人身御供の方面は毫も無くして、全く鬼やらひとなつて現れて居るのであります。精しくは伊勢參宮名所圖繪に於て御承知願ひたいのであります。尙ほ鬼やらひの場合は元亨釋書に依りますと、九州太宰府の觀世音寺にも毎年行はれて居つたのであつて、僧圓爾が九州を旅行したとき、丁度其日に當つたので、鬼にされる爲に到頭捕つたといふことが、元亨釋書の七卷に見えて居ります。然るに追儺の方面を全く有しないで、人身御供の方面のみに現れたのは、上總の坂戸明神の御祭の場合であります。房總志料の記事に依りますと、坂戸明神に於ても昔は、人身御供を供へて居つたものと見えて、其後段々其事が緩和されて來るに當つては一村相會して議事を開いて人身御供になる人を選拔し、其人を神主が眞無板の上に載せ、庖刀を振つて切る眞似をして神前に供へたさうであります。さうすると其人は、三

年を待たずして死ぬと信ぜられたので、其人身御供になることを欲する者が自然少く、時勢の進歩と共に全く其習慣が廢せられたと傳へられて居ります。勿論今日坂戸明神の祭には、そんな形跡は無いのであります。併し房總志料の記事は、今申上げた通り傳へて居りますから、昔はさういふ人身御供の痕跡を見せしむるやうな儀式が、此社に存して居つたものとも考へられます。斯の如きは全く人身御供の儀式を、表面から吾人に見せるものであつて、伊勢名所圖繪の惠日山觀音寺の鬼やらひの場合とは、正反對であります。然るに此鬼やらひ即ち追儺と人身御供とが、一緒にくッ付いた位置を示すものは、國府宮の直會祭ではなからうかと考へられます。

爰で一寸外國の例を參考までに附加へて置きますが、西藏に於ても矢張り是と同樣に、鬼やらひがあつたのでありまして、西藏の場合では、其鬼になる所のものは乞食であります。乞食を恐らく金で以て傭つて來るのでありませうが、是が丁度日本でいへば、鬼やらひの場合に鬼の面を被ると同じやうに、動物の毛を被つて動物に出立ち、それが其年の有ゆる不幸、病氣、災害一切の惡事を象徵し、それが或喇嘛寺の門戸からして飛出して來ますと、町の者は狂氣の如く太鼓を打ち喇叭を吹いて、さうして惡魔を追遣るのであります。觀衆は其惡魔に向つて石投なげ、棒を以て彼を叩くのであります。さういふ目に逢ひながら町を逃廻つて、遂に郊外へ走り去るのであります。時としては郊外に走り去るまでに、殺

されてしまふこともあるさうでありますが、斯の如くにして先づ人の居ない田舍へ其乞食が逃去ることになつて、舊年の害惡を去つて幸多き新年を迎へる儀式が終ることになつて居るのであります。併し尙此に附加へて置くべき面白い卜占の一種が、西藏にはありますのは、其後で各人所有の小馬を一定の場所に放つのであります。若し其小馬が其放たれた場所から道を間違へずに其主人の家に戻れば、其主人の家は非常に幸福になるし、若し小馬が誤つて道を失つて、其主人の家に歸り着くことが出來ない時は、其家は非常に不幸が來ると信ぜられて居るのであります。是も一種の占ひであつて、先程申上げた尾張國府宮に於ける厄を脊負つた男、即ちシンといはれて居る所の男の脊に附けた蠟燭の火の消えやうに依つて、其年の五穀の豊凶を占ふとか、或は其男が神社の門の側を通行する工合に依つて、其年の豊凶を占ふとかいつたとと、能く似て居るのであります。此は正月の神事儀式に關聯して、大に注意すべき一事であると思ふのであります。

是と同樣の事が昔羅馬にもあつて、羅馬では之をレムリア Lemuria といつて居つたのであります。レムリアとは死んだ人間の靈魂を祭る神事を意味するのであつて、死人の靈が生きた人間に害を與へるものを、豆を拋り付けて防ぐ所の儀式であります。恰も鬼に桃の實を伊弉諾尊が拋げて之を防ぎ、又國府宮の直會祭に於ては、桃の枝と柳の枝とから出來て居る飛礫を、其厄を脊負つた男に拋り付けると同樣

のとであると思ふのであります。

蘇格蘭に於ても毎年、年の終りに於て惡魔祓ひの儀式をやつて、人が其家の周圍を三度廻るのであつて、之を蘇格蘭では、ホグマネーHogmaneyと呼んで居るのであります。

トリエストTriesteに於ては、シルヴエスター祭の前夜に家の僕が、棒と帚とを以て惡魔を家から祓出す儀式をやつて善神を迎へ、幸福を家に招く神事を行ふさうであります。ボイオチアのカイロネーアChaeroneaでは、日本で申せば市長格の人が其市役所に於て、又一軒一軒の戸主は自分の家に於て、鞭で以て奴隷を打つて、其家の外に放逐する習慣があります。其時に唱へる呪文は、「饑餓は外、福と健康は内」と叫ぶのであります。丁度日本で「鬼は外福は内」の言葉と、能く似て居ると思ふのであります。斯ういふ風で年末歳首に當つて、舊年の厄を佛つて新年の幸福を迎へるといふことは、獨り日本のみならず、何處の國でも實行されて居つたのであつて、此場合ミデイアムになる所の者は、舊年の厄を象徴し、そいつが追ひやられるのであります。其ミデイアムは舊年の厄で、即ち古い年の災難不幸疾病と云ふとのを現して居るのであります。全體鬼やらひの鬼は今日でこそ、あゝいふ形をして居る惡魔ですけれども、日本の古い思想信仰の上から考へて見ますと、主として疾病を象徴したものに外ならぬと思ふのであります。

此方面のお話は先づ其位にして置きますが、既に申上げた通り日本德川時代の學者吉見幸和などは、さういふ人身御供の形跡のある御祭は、之を淫祠として斷然禁じた方が宜いといふことを、御上に上申した位である。是は如何にも尤なことであつて、儒教道德などに依つて鍛へ上げられた德川時代の學者の頭を以て言へば、どうしてもさうでなければならぬことであると思ふ。此立場からして矢張り尾張の學者であつた眞野時繩の神家常談に於て、直會祭が決して人身御供の御祭の如きものでなくして、全く追儺の神事であるといふことを主張して居ります。追儺の神事ならば彼は決して、マジックでもなく迷信でもないと考へたからであります。さういふ立場からして山鹿素行の如きも、其中朝事實に於て論じて居る所を見ますと、昔仁德天皇が茨田の堤を築く時に、どうしても其堤が築かれなかつた爲に强頸、衫子の二人を犧牲にしようとした時に、强頸は命に從つて直に犧牲になつたけれども、衫子は、人身供犧を欲する如き神樣は、眞の神でないと稱して、自ら犧牲になることを肯じなかつたのでありますが、此衫子の理屈を尤もとして、却て仁德天皇が人身御供などを川の神に獻げようとするとの無智無謀なことを、山鹿素行は論じて居るのであります。斯ういふ儒教道德の立場からいへば、勿論人身御供の如き殘酷なる神事は許すことが出來ぬのであります。孟子に見える如く「其聲を聞いて其肉を食ふに忍びず、是を以て君子は庖廚に遠ざかる」といふ儒教思想の立場からいへば、神が人間の犧牲を要求するが如きとは、到底考

へられないとであります。若し之を要求するものがあれば、さういふ神は淫祠邪敎の神と言はざるを得ないのでありますから、其立場から德川時代の學者が、國府宮の直會祭を人身御供の神事でないと解釋して、單に追儺の古式であると說明し去らうとするのも、亦尤もなとであつたと思ふのであります。

併しながら私の考では、國府宮のあの御祭を歷史的に辿つて見るといふと、人身御供の痕跡を全然其の昔に於て否定し去る十分な根據を發見するとは、むづかしからうと思ふのであります。詰り結論を申せば、國府宮のあの祭といふものは、恐らく極の〳〵大昔に、存して居つたかも知れない人身御供といつたやうなものゝ名殘と追儺とが、一緒になつて來て居ると見るのが、或は穩當ではなからうかと思はれる。そこで其結論に達する道行きとして、全體人身御供即ち人身供犧、西洋語でヒユーマン、サクリフアイスなるものが、日本にいつか曾て存して居つたとがあるかどうかといふ一般の問題になつて來るのであります。此点に就いて少しく卑見の存する所を述べて見たいと思ふのであります。

私はどつちかといふと今日でも、日本の昔に於て人身御供即ちヒユーマン、サクリフアイスも、必ずしも無かつたといふ論斷は出來ないと考へて居る一人であります。勿論其人身御供を要求した所の神樣は、古事記日本書紀の神代の卷に現れて居る高天原系統の神であつたか、或は各地方地方の後の言葉でいへば邪神、即ち宗敎學上普通の言葉でいへばヌーメンローキーNumen locíであつたかといへば、寧ろ

其後者の方であつたらうと思ふのでありますが、兎に角さういふ惡靈邪鬼が必ずしも無かつたとはいへぬと思ふのであります。隨つて其惡靈邪鬼に供する人身御供なるものも全然無かつたと斷言することは、むづかしいと思ふのであります。先づ神話に現れた所に依りますと、奇稻田姫が八岐大蛇の犧牲にならうとした所を、素盞嗚尊が八岐大蛇を退治して姫を救はれた話の如き、勿論神話たることを失はぬけれども、斯かる神話が偶然存して居つた譯ではないと思ふのであります。人或は斯ういふものを、總て外國から輸入した思想で以て作り上げた話だと解釋しようとする向もあるやうでありますけれども、皆が皆さう見ることは出來ぬと思ふのであります。例へば今昔物語の如き佛教思想などの影響のあるものになつて來ますれば、あの中に現れてをる美作國に於ける中參及高野の神、前者は其神が猿であり、後者は其神が蛇であつて、此二つの神に人身御供を年々奉つて居つた所、或年或勇士が犬を連れて行つて之を退治して、人身御供の跡を絶つてしまつた話の如き、或は外國輸入の物語を換骨脫胎させて、さういふ形に作り上げたのかも分らぬのであります。

殊に東國旅行談などになりますと、さよといふ女の子が淺香沼に住んでをる大蛇の犧牲にならうとする所を、さよの唱へた觀音經の功力に依つて救はれた話などが出て居りますが、此等は佛教思想などが入つた後に拵へた所の仕組んだ話とも考へられるのであります。併しそれだからと云つて人身御供即ち

ヒユーマン、サクリフアイスに關する日本の古來からの言傳が、皆が皆外國思想の影響を受けた後に作り上げた作り話であると解釋するとも、寧ろ極端な考へではなからうかと思はれるのであります。勿論素盞嗚尊と奇稻田姫の場合の如き、既に挿神記の中にも、法苑珠林(卷四十二)の中にも能く似た話が出て居るのであつて、一方から考へれば、さういふものを換骨脱胎して作つたものと見られるけれども、同時に下の如くも考へられる、即ち日本の昔にもさういふ人身御供といふやうな習慣があつたのを、日本書紀の記者が之を文字に書現さうとする時に、丁度其思想と能く合つた支那の文字を藉りて來る關係上、支那の書物に求めて其書振りに倣ひ、此場合は其文句まで藉りて來た結果、今日から見るといふとさういふ支那の文書を換骨脱胎して作り替へた如く思はれるやうにみえるけれども、其實一方日本にもさういふ事實があり、それを漢字に依つて記載する爲に支那に存して居つたさういふ物語記載の文字を唯借りたに過ぎないとも考へられるのであります。それは丁度日本の開闢神話を記するのに、日本書紀が淮南子の言葉を借りて來て居るけれども、唯淮南子を換骨脱胎させて、あんなものを附記したに止らないのであつて、丁度その思想に能く似たものが、日本にも存して居るが爲に、淮南子を藉りて日本の思想を現はさうとしたのであるとも考へられるのであります。詰り思想信仰上の日漢合鏡の如きものであると、あれを考へる方が寧ろ穩當であらうかとも考へられるのであります。そこで德川時代の學者

にしても、一方では漢學者流の道德思想に支配されて、人身御供といふ殘酷な神事の存在を、日本の御宮に否定しようとする向もあれば、他方に於ては同じ德川時代の學者でも、大昔のことであるから、さういふことが必ずしもなかつたとも言はれまいといふことを、說いて居る人も無いではないのであります。例へば谷川士淸が日本書紀通證に於て、玉木正英は藻鹽草（三　卷）に於て奇稻田姫の場合を以て人身御供の一つの事實であると認めた如きは、其適例であります。さういふ風で同じ德川時代の學者でも、或方面の人は人身御供の存在を日本古代に全然否定しようとする人もあると同時に、又必ずしもさういふものが無かつたとは、いはれないと見る側の學者もあるのであります。

そこで更に奇稻田姫と八岐大蛇の如き、全く神話に現れた人身御供の場合を外にして、もう少し下つて日本の歷史時代に入つて其所謂人身御供なるものが、なかつたかどうかを考へて見ますと先づ吾人の頭に直ぐ浮びますものは、日本書紀に現れて居ります通り、景行天皇の朝に日本武の皇子が東夷御征伐の時、相模から上總の方面に御渡りにならうとする際に、あの海が荒れたとき是は必ず海の神が禍ひするのであらうからと云つて橘姫は自分の身を以て日本武の皇子の生命を贖はうと仰せられて、海に御入りになりますと、暴風が止んで船が安全に彼岸に着くことが出來たといふことが見えて居りますし、又筑前風土記の一文を讀みますと、日本武の皇子の場合と同じやうに、狹手彥といふ人が其妾の那古君を連れ

て海を渡ります時に、海が荒れた際に、那古君は狹手彦の爲に海に投じて、身を以て海神の犧牲になつたといふことが見えて居りますが、日本武の皇子の話の如きは、半ば傳說的、半ば歷史的たるとは勿論でありますけれども、全く跡方もなき作り話とも考へられないのであります。

日本武の皇子と橘姫の場合の如き、根も葉もなき小說と見るとも出來ぬと思ふのであります。況や時代がずつと下つて鎌倉時代になつても、同樣の心理的事實を發見することが出來る。例へば吾妻鏡七卷に依りますと、仁田四郎忠常が病氣に罹りました時に、其妻が其病氣平癒を三島神社に祈つて社參をした際に洪水が起つて、到頭船が轉覆してしまつた。其時乘合して居つた所の多くの人は皆助かつたのに、忠常の妻一人が溺死してしまつたのであります。といふのは忠常の妻は三島明神に祈つて、どうか夫の病を治して下さるやうに、若し夫の病が治れば、自分の生命を御縮め下さつても差支ないと御願ひ致したのでありますから、そこで其社參の歸りに自分の乘つて居つた船が轉覆をして、乘合の人は皆助かつたのに、自分だけ溺死したのは、恐らく三島明神が其生命を召して、夫忠常を助けようとする御考であつて、忠常の妻の願ひを容れられた結果であらうと、當時の人が言つて居つたのであります。斯の如きも矢張り夫の爲に、其妻が身代りになつて一身を犧牲にした一種の人身供犧であると思ふのであります。斯ういふとも全く作り話、小說であるとは考へられないのであります。又先程も申した仁德天皇の

朝の强頸の犧牲の如きも、全然作り話と退け去るとも出來ないと思ふのであります。

若し之を全然作り話と退け去るならば、さうであるといふ十分な證據を擧げなければならぬと思ふ。證據無しに唯獨斷的に、それは作り話であるときめこんで突放してしまふ譯には行かぬと思ふのであります。のみならず史的材料としては稍其値打が降りますけれども、宇都宮大明神代々奇瑞之事といふ本がありますが、此本に依りますと文治五年に源頼朝が奥州征伐をしました時に、宇津宮大明神に祈つて若し幸に戰爭が勝つならば、人間の犧牲を奉らうといふことを申上げた結果奥州の藤原氏を亡して歸り途に、樋爪五郎季衡といふ者を宇都宮大明神に奉つて其犧牲にした、即ちヒューマン、サクリフアイスにしたといふことが出て居ります。此書を有の儘に信ずれば、頼朝自らも人間を犧牲にして神を祭つたといふことが、明かに見えるけれども、同じことを吾妻鏡（第九卷）に依つて見ますと、必ずしも人間の犧牲を神に奉るといふことは書いてない、解釋の仕やうに依つては、吾妻鏡の文では俘虜を神主の奴隷に奉らうといつたやうな意味とも解せるやうに見えて居るのであります。それであるから宇都宮大明神代々奇瑞之事の中に書いてある通りに、頼朝が果して本當に樋爪五郎季衡を犧牲にして、普通の犧牲を奉るやうに人身犧牲として神に捧げたかどうかは、少々疑問でありますけれども、一方からいへば鎌倉時代の出來事として斯ういふ事實を記載したものが見えるといふことは、注意すべきことであると思ふのであります。

勿論宇都宮大明神代々奇瑞之事といふ書物は、頼朝の時代を去ると大分後に書かれたらしく、其奥書には文明十六年九月三十日とあるから、時代が餘程後であるとは勿論であります。併し何れにしても武家時代に於て、人間を犧牲にするといふやうなことが、全く考へられなかつたとではなからうと思ふのであります。

加之軍記物を讀んで見ますと、軍神の血祭といふことが澤山出て來る、例へば平家物語（卷の九）に畠山重忠が長瀬重綱の首を斬つて、軍神の血祭にしたといふことが見えるし、又源義經が其敵の人々二十四人の首を斬つて、軍神を祭つて戰爭の門出としたといふことも見えるのであります。それは平家物語の十二卷にあります。其点は丁度希臘の戰爭の神のアレースArsが矢張りさういふ殺伐の犧牲を好んだと、同樣の趣があるのであります。それですから武家時代に於て、人身御供を神に奉るといふやうなことが全然無かつたとは、どうしても考へられないのであります。豊岡大明神祭禮記の如き少々誇大にした点もありませうがその記事を見ますと、文祿元年……高麗へ三十八萬騎……御乱入……釜山着岸……先軍神之血祭に任當道俗男女無嫌投切二伐殺事不知員（續群書類從、三卷）とあります。

其外に色々人柱の話が殘つて居りますが、是も元全然無かつたものを、佛教思想などから藉りて來て作つた話であるとのみ、解釋するとはどうかと思はれるのであります。例へば續近世畸人傳は伴蒿蹊の

著でありますが、其中には備前國で海から押して來る浪を土堤を作つて防いで新田を開墾して、多くの田地としようとした時に、其堤が決潰しない爲に人柱を要するのできたといふ未亡人の婦が、自ら進んで其人柱になつたので、今日でも於幾多明神と呼ばれて居るといふ話が遺つて居りますし、又堀尾吉晴が出雲國の大名となつた時に、あの松江の大橋を架けようとしても、どうしても水が急であつて架けることが出來なかつた時に、源助といふ男が人柱になつた結果、能く容易に橋を架けることが出來たのでありますが、其源助の墓場は松江大橋の橋側に今日尙ほ依然として存して、香華尙ほ絕えずといふ有樣であります。尙法學博士穗積陳重男爵に由れば、ローマに於て五月十五日アルガイ Argie と稱する人形二十三個をスブリキウス橋 pons Sublicius よりチベル河に投入るゝ風習は、往古河神チベリヌス Tiberinus を祭りて洪水を免れんとし、六十歲の老人を橋上より河に投入れたるに起因したるものなり（穗積陳重著隱居論）とあります。又津輕志留遍等の書物に依つて見ますと陸奧南津輕郡中鄕村字境松の淺瀨石川上流の堰が何時でも切れて水が氾濫して困る結果、其處の關を完全に修復しようとした時に、矢張り人柱が入用といふことになつて阿部安高即ち堰八といふ人が自ら進んで人柱となつた結果、其堰が立派に出來上つた爲に、安高は藤崎の堰神社として慶長十四年以來祭られたのであります。此等諸例の如き比較的新しいのでありますから、之を全然作つた小說であるとは解釋し難いと思ふのであります。尙ほ此事に

就いては「日本及日本人」が大正八年九月に義民號を出して、其中に此記事を載せて居るから、就いて御覽を願ひたいと思ふのでございます。

加之例の殉死であります。隨分此殉死の例は、日本に於て古今少くなかつたと思ふのであります。最も近い例としては、乃木大將夫妻を擧げるとが出來るのであり、日本の古代に於ても殉死の例が少くなかつたやうに思ふのであります。勿論野見宿彌が土偶を作つて殉死に代へたといふとは、歴史的正確な事實でないとしても、其爲に殉死といふ事實が、全然日本古代に無かつたといふとは出來ないと思ふのであります。例へば孝德天皇の大化革新の政事を行はれた際に、殉死が如何にも殘酷な習慣であるから斯ういふ舊慣はすつかり止めてしまつたが宜いといふとを詔されて居りますし、又類聚三代格（十二卷）を讀みますと、延曆十六年の太政官符として、殉死といふやうなとが如何にも殘酷なとであるから、之を廢めなければならぬといふとが出て居ります。又令の義解を讀みますと、信濃國の如きは山國であつて、中央の文化がまだ及んで居らなかつた爲に、夫が死ぬといふと、其妻が殉死する場合もあつたものと見えて、さういふとは甚だ宜しくないとである、其風俗は改良させた方が宜いといふとを、朝廷から達せられて居る。此等は明かに古代の日本に、殉死といふ事實があつたとを證明すると思ふ、加之日本書紀に依りますと、持統天皇の朝に大津の皇子に死を賜はつた時に、其妃が走つて皇子に殉死したのを

見て、多くの人が涙を垂れて悲んだといふことが出て居ります。又日本のことを書いた支那の書物としては例之魏志倭人傳に於ては、九州方面の女の酋長であつたらうと思ふ所の卑彌呼が死んだ時に、殉死する者奴婢百餘人と書いてあります、さういふ殉死の風が、日本に決して少くなかつたことを示すと思ふのであります。斯ういふ精神狀態であつた太古の日本に於て、それと同樣な精神狀態で出來る所の人身供犧の如きものが、全然無かつたと考へるよりも、寧ろ傳說として傳はつて居るやうに事實存してをつたと見た方が、穩當ではなからうかといふ感じを、私は起すのであります。況んや武家時代になつてからも隨分さういふ殘酷の風が跡を絕たぬ。例へば源義經と賴朝があゝいふ風に仲が惡くなつた後に、義經の妾の靜が男の子を生んだ時に、之を生かして置いては後日の爲にならぬといふので、到頭靜が男子を生むや否やそれを捕へて賴朝方の者が、相模の海に投じてしまつた話が、吾妻鏡の中に書いてある。斯の如き殘酷を敢てして何とも思はなかつたといふやうな時代に於ては、人身御供を神に獻することは、朝飯前の仕事であつたらうと考へられる。否德川氏の世になつてからも、嬰兒殺は必ずしも珍しくない。秀忠の室崇源院夫人は、嫉妬の餘神尾氏お靜の方に出來た子供を水に入れてしまひ、細川忠興の書は、此風、雲の上に迄及んでをることを記してをる（細川家記）。で斯ういふことを併せ考へて、私は日本の太古から餘程長い間人身御供の如き習慣は、各地方地方に長くまで存して居つたことを想像するのであります。

其点に就いてはフエヤバンクスFairbanksといふ人が、希臘の宗教に就いて論じて居る所が、大に參考になるのであります。即ちフエヤバンクスは希臘の古代に、矢張り人身御供といふやうなものがあつたといふことを是認するのであります。而かも彼が言つて居る通り、必ず確かに此場合が昔行はれて居つた人身御供であるといふことを、歴史上の事實として指摘せよと言はれては困るけれども、其反對に人身御供が全然無かつたといふことは、立證されないといふことを論じて居るのであります。例へば希臘人がトロイへ出發しようとした時に、イフイゲナイヤ Ipligenaia を神の犧牲にするし、又トロイ戰爭から希臘人が戻る時には、ポリクセナ Polyxena を神の犧牲にしたと傳へられて居りますし、テーベの町を圍んだ所の軍隊をやつつける爲に、自分の息子をクレオン Kreon といふ人が神の犧牲にしたと、又コドロス Kodros といふ人が雅典の町を救ふ爲に、自ら犧牲になつたといふことを書いて居りますし、又雅典市に疫病が流行つた場合には、エピメニデス Epimenides が一青年を神に捧げて、其厄を免れむとしたといふことが傳へられて居ります。それでフエヤバンクスは斯ういつて居ります。斯の如き諸々の例は、勿論神話的傳説的であるけれども、戰爭が起り疫病が流行するといふやうな時に、先づ人間を神の犧牲にして神の怒を解かうといふ心理狀態が、當時の希臘人にあつたといふことを、此等の傳説が示して居ると述べて居ります。（フエヤバンクス著希臘の宗教參照）であるから、サラミス灣の戰爭をやる前に、三人の波

斯の虜をテーミストクレース Themistokles は、神の犧牲にして居りますし、又アルカデイヤ Arkadia でツオイス Teus を祭り、デロス Delos でツオイスを祭り、レウカス Leukas でアポロン Apollon を祭る時には、矢張り人間を犧牲に奉つて居つたのであります。又死刑を宣告された罪人が、此等の犧牲になつたともありますが、其ヒューマン、サクリファイスなるものは之に由つて、或は諸々の禍災を脱する事を得て町の大祓になると考へられたのであります。又デイオニソス Dionysos 若くはアルテミス Artemis の如き神を祭る場合には、山羊とか家畜とかいふものを以て、人身供犧に代へた場合もありますし、又是等の動物に被らしむるに人間の衣服を以てして、恰も人間を犧牲に供する如き眞似して、神を喜ばすに至つたといふやうなとも、フエアバンクスは述べて居るのであります。（フエヤバンクス著希臘の宗教。一〇五頁）尙ハイド Hyde 氏の研究に據れば、アムブラキア Ambracia 灣畔アルタ架橋の工事の時どうしても川の神が、怒つて之を妨げ樣とした時に工長の妻が身を挺して河神の犧牲となつて、水に沈み、以て無事に架橋工事が成功したと云ふ傳說の如きは昔河神に奉つた人身供犧の遺物だと云ふことである。（ハイド著、希臘の宗教とその宗教的遺俗。一五七頁）これは我國にては出雲の松江大橋を作る際に於ける源助の河神犧牲の話にそつくりではないか。

外國の例でも斯ういふ風であるから、日本に於て全然人身供犧がなかつたといふ證據を擧げるといつ

たならば、隨分困難なことになる。寧ろ私は以上述べた色々の事例からして、人身供犧が日本にもあつたといふ方に、唯今は傾いて居るのであります。國府宮の追儺祭の如きも、此人身供犧の祭事と追儺とが一緒にくつ付いた痕跡を見せて居るものではなからうかとも、考へられる次第であります。

加之更に進んで古い時分に於ける日本人の神の觀念を取調べて見ますと、人身供犧を要するやうな性質を有つた神が、必ずしも皆無ではなかつたのであります。例へば筑後風土記の逸文を讀んで見ますと、筑後國に麁猛神(アラブルカミ)があつて、往來の人に非常に難儀を掛け、多くの者が其神の爲に殺されるから、人々はさういふ麁猛神を呼んで、人命盡神(ヒトノイノチツクシルノカミ)と稱して居つたのであります。又肥前風土記に於ても同じやうな記事が見える、荒神がある爲に往來の人が、非常に難儀をしたといふやうなことが見えるのであります。加之備後風土記を讀みますと、有名な話でありますが、武塔神が一晩宿を借りようとした時に、巨旦將來といふ富豪が之を肯じなかつた爲に、武塔塔は大に怒つて巨旦將來の子孫を皆殺してしまつたといふことが見えます。自分の意に從はなかつた爲に、其子孫を皆塵殺してしまふといふやうな神が人身供犧を喜ばなかつたとするならば、寧ろ異樣に感ぜられる次第である。斯ういふ狂暴な神が人身供犧を求めるとは、寧ろ自然であると私は考へるのであります。そこで彼の祓の場合に人形を作つて、其人形に厄難を脊負はして之を海へ流すといふことになつて居りますが、此事は延喜式の四時祭及び祝詞などを調

べて見ますと、御贖物として鐵人像二若くは金銀で造つた人像各々二などといふことが見えて居ります。のみならず銀で作つた人像に禍災を脊負はせることが見えるのであります。さうして一條兼良公の如きは、さういふ人間の像は、詰り災禍厄難を彼れに移し用ゐるものであると註釋されて居る。要するに今日紙で作つた人形の代りに金銀若くは鐵の像を人形として用ゐて、それに厄を脊負はして棄てるといふ譯になつて居るのであります。が更に名米氏本系帳系圖を調べますといふと、どうも昔は天皇の御命を贖ふ爲に、諸國の國造が特にさういふ人間を朝廷に奉つたものと見えます。詰り本當の人間を朝廷に奉つて、其者に天皇の御厄を總て脊負はせて、今日人形に厄を脊負はせると同じやうに海にでも流して仕舞つたといふやうな習慣のあつたのでは無からうかと云ふことを、吾人の眼前に髣髴せしむるやうな記事を見ることが出來るのであります。伴信友も其著比古婆衣第十四の卷にその事を述べてをる。（信友全集、四卷、三〇六。）勿論其場合に天皇の御命を贖ふ所の人、即ち天皇の御身代りになつて其厄を脊負つて立つ所の人を海に流したか或は殺したか、それは明かな記錄が無いからどうも分らぬのでありますが、それが人形なれば遂に之を河海に流したのであつて、其天皇の御命を贖ふ所の人とは、畢竟西洋の言葉で申す人間のスケイプゴウトに外ならぬのであります。南米インカ族の場合では、國王病革るや、王子を神に供犧して王の疾平癒を祈つてをります。（ポプキンス著、宗教史。一一六頁）人間のスケイプゴウトで無く本當

の其れの場合は、舊約全書の利未記（十六章）の中に精しく記載されて居る、是は本當の動物の山羊で、其一匹はエホバの神に奉り、他の一匹は沙漠の中に棲んで居るアザゼル Azazel といふ惡魔に奉る。即ち人間の總ての厄を一匹の山羊に脊負はせて、惡鬼に奉るといふ場合であつて、イスラエル人も其昔は、斯の如き一種の大祓の贖物山羊の犧牲を惡魔に捧げて居つたことを見ることが出來るのであります。即ち此場合には其一匹の山羊は、惡魔に捧げられる爲に總ての人間の厄を脊負つて曠野に放逐されるのでありますが、イスラエルのやうな牧畜生活をした人民の間の傳說に於ては、それを曠野に持つて行つてアザゼルといふ惡魔に投遣つてしまふといふことになつて、彼等の大祓の儀式が濟むことに結末して居るのであります。

そこでちよつと申上げて置きますが、日本には全體追儺の儀式が何時頃からあつたらうかといふことを考へますのに、文武天皇の慶雲二年に天下が大に疫病で苦んだ爲に、始めて大なる追儺を行ふたといふ記事が、書物に見えるのであります。（扶桑略記五）又同じく慶雲三年には、矢張り疫病が流行つて人が多く死んだ爲に、始めて土牛を作つて大に追儺を行つたことが見えるのであります。（續日本紀三卷）勿論此追儺の風は、支那の風俗とも關係があつて此の如く土牛を造つたなどといふのかも知れないのであるが、

兎に角追儺といふ事實が、日本に行はれた古い事は、文武天皇の頃であらうと考へられるのであります。否或はもう少し遡つて、持統天皇の三年正月二日に大學寮献杖八十枚（日本書紀三十卷）とありますのが、恐らく追儺の一番初めではなからうかとも思はれるのであります。此杖なるものは清和天皇の貞觀元年正月十日の記事には、剛卯杖と書かれて居りますし、（三代實錄四卷）文德天皇二年の正月の條に於ては諸衞府献卯杖逐精魅也（文德實錄四）と記して居ります。斯ういふ風で持統天皇の朝に大學寮が奉つた杖も畢竟卯杖であつて、惡魔をそれを以て追遣る棒であるといふ事になるのであるから、此に追儺の起原を求めて來ても、差支ないかと思はれるのであります。勿論更に神代の卷に遡つて考へれば、伊弉諾尊が黄泉國から御歸りになる時に、黄泉國の黄泉志許米が之を追つて來ました時に、桃の實を取つて之を投げて、黄泉國の惡魔を追拂はれたといふ記事に遡る事も出來るのでありませうが、先づ人皇の時代になつて考へれば、持統天皇の頃に杖八十枚を献ずるといふ、あの記事が、追儺の正史に現れた起原を日本に於ては形作つて居りはせぬかと思はれるのであります。

それで尙ほ御參考に、外國の例を一二附加へて置きますが、ドスル Drews 氏に據ると、小亞細亞地方に於ては、大禊の儀式をやる場合に、人事意の如くならなかつた所の古い年の厄を脊負はせる爲に、罪人を一人犧牲として殺して之を舊歲の代表者とし、他は新年を代表する所の人物を選んで王樣の名譽

を與へて、市中を引廻すといふ習慣があります。（ドルス著、基督神話。一八七頁）

それから獨逸民族やスラブ民族の中に於ては、矢張り新年を迎ふるに當つて、舊歲を代表する所の人間若くは藁で作つた所の人形を、厄を脊負つた者として水に流し、若くは相當の儀式を以て之を燒棄てると同時に、春の神が立派に花環で以て飾られて、其處へ現はれて來る祭事を、執行するのであります。（仝書。七一頁）

希臘に於ては雅典に、アポロンの神の御祭であるタルゲリア Thargelia といふ御祭があるが、此場合に於ても厄を脊負つた所の男が二人出まして、市中引張り廻されながら、鞭で以て打たれるのであります。さうして總て其所の人々の罪を脊負つて、國境外に放逐されるのであります。

又ニゲリア Nigelia に於ては、今日でも市中の人々の罪は、奴隷の女の子を選んで、それに毎年脊負はせて而して市中を引張り廻し、方々の家の前を通る度毎に家から人が出て來て一年中の罪を其女の子に擦り付け、遂に憫れな奴隷の女の子を引張つて行つて、水の中に投じてしまひ、市中の人々の罪を流すといふ習慣があるのであります。（カーペンター著比較宗教。二〇六頁及二〇七頁）

それから羅馬に於ては、農業の神樣であるサツルヌスを祭つた所のサツルナリア Saturnalia といふ御祭がありますが、此御祭に於ても、其當時の災厄を犧牲になる所の山羊に脊負はして、其山羊を棄て

るのであります。元は恐らく人間を、此場合に於て犧牲にしたらうと考へられるのであります。（ポプキンス著、同書。五〇七）

又キッテルといふ學者の說に依りますと、丁度日本で橋を架ける時に人柱を奉るやうに、昔カナアンの地に於ては新しく家を建築します時に、其家を建てる土地の神の怒に觸れないやうに、人身供犧として、多くの子供を奉る爲に、新築家屋の壁に其犧牲になる所の子供を塗り込んでしまつたといふ事が、今日メギドー Megido やゲゼル Gezer の土地を新しく發掘した結果、キッテル Kittel に由つて、證明されて來たのであります。（キッテル著。舊約全書の學術的研究參照）

同樣の事實をマルチー Marti 敎授も、其舊約聖書の本文批評をする時に證明をされて居るのであります。（マルチー著、舊約全書の宗敎。八三頁）是れ舊約書の列王紀畧に、

ベテル人ヒエルはエリコを建てたり、彼れ其基を置ける時に長子を失ひ、其門を建つる時に季子を失へり。（上、一六）モアブ王其長子をとりて、これを石垣の上に捧げて燔祭となしたり。（下、三）

尙ハイドの研究に據ると、希臘のレスボス Lesbos では家を建る時の地鎭祭に、その新礎石の上に人影を映寫せしめる事を必要とする習慣がある、之れは希臘人の考に由れば、人影即ち希臘語のアイドーロンはその人の靈魂であつて、丁度日本語でも靈魂即ちたましひの事を古語で又御影（カゲ）即ち

御靈（カゲ）と呼んでをつたと同樣で、之を新家の新礎石の上に映寫せしむるのは人身供犧の緩和された形式であることは、明白である。上記レスボスでは此目的に供する爲めに、人間を捕へて來る狀況は昔の直會祭に旅人を捕へ廻つた樣子に酷似してをるし、又此目的の爲めに捕へられてその影を礎石に映寫された人は、數年ならずして死すと云ふ信仰が伴つて居つた、之れはイスラエルの場合、又我國の人身供犧の場合と彼此參考し合ふ可きものであると考へる。（ハイド著、希臘の宗教と其宗教的遺俗。一五五頁）と云つてをるものに當るのである。斯う云ふ風に外國の例を考へて見ても、其人身供犧と贖罪用のスケイプゴウト、即ち日本でいふ「命贖ふ所の人」若くは鐵人、銀人、金人、人形などいふものとの關係が、極めて密接であるといふ事を知る事が出來るのであります。さうしますと、彼の國府宮の直會祭の如きも、丁度此範疇に屬するものであつて、厄を脊負つて立つ所の儺追の神事と人身供犧の神事とが、密接に結び付いて、昔存して居つた形跡を吾人に敎へるものではなからうかと、私は先きに考へた次第であります。勿論私の考へも、學問上に云ふ一個の臆說に過ないのであつて、色々の高說を拜聽して之を訂正し、將來確つかりした定說を打ち立てゝ行ける樣になれば仕合と存じ、爰に僅に一家言を提出して死馬の骨と致したに過ぎないのであります。

天長節の地中海上に祝せらるゝと聞きて

巴武生

大君のよはひを祝ふ聲すなり
　西のはてなるなみの上にも

大君の御稜威は地中の海までも
　かゞやき渡ると聞くそうれしき